

# 初登頂の精神で心の進化を見つめる

京都大学霊長類研究所所長

松沢哲郎

## 楽天家の末っ子

東京深川の教員寮で、小学校教師の両親と男の子三人がちゃぶ台を囲んで食事をしている。それが子ども時代の記憶です。昭和二十五年に愛媛の松山で産まれましたが、一年ほどで、両親が青雲の志をもって上京したんです。時は朝鮮特需で経済が右肩上がりの時代です。僕は末っ子で兄たちとは八つと六つ離れていましたから遊び相手にはならず、兄たちが飼っていた伝書鳩の世話を手伝う役目でした。小学校四年生の時、千葉県の船橋に家を建てて引っ越しました。父が三人の子どもの勉強部屋兼書斎を作り、そこにブリタニカの百科事典や世界美術、日本の歴史、世界の歴史などの全集を並べてくれたので、そこが僕のお気に入りの場所になりました。小学校はそのまま深川で一時間以上かけて通



二歳半松山にて。末っ子でかわいがられた。



学しており、近所に友達がいなかったんです。しかも両親が働いて鍵っ子でしたから自ずと書物が友達になりました。百科事典を眺めたり、全集を片っ端から手に取ってみたり。兄たちが二メートル四方の大きな鳥小屋を作ってインコやブンチョウ、ジュウシマツなどの小鳥からキジやチャボまでいろいろな鳥を飼っていたので、ここでも鳥の面倒をみていました。ハムスターやリス、ヘビも飼いましたね。歳の離れた兄たちとの共通の話題はもっぱら動物のことでした。周囲は自然だらけですから、夏には虫取りをし、あぜ道でカエルやザリガニを捕まえました。まあ普通の男の子です。

中学校は都内の両国中学に進みました。実は、中学一年が終わる春に母を亡くしています。当時は反抗期で病床の母を思いやることができなかったのが今も心残りです。すでに大学を出て建設会社に勤めていた長兄が母親代わりに食事や弁当を作ってくれました。末っ子が不憫だったのか、トランペットやフルートも買ってくれて、楽器も楽しみましたね。高校は両国高校、旧府立三中です。公立の小学校、中学校、高校を出て、国立大学に行く。当時は国立大学の月謝が千円ですから、それ以上の親孝行はないわけです。とくに東京大学に行きたいと思ったことはないけれど、下町のできる子たちがみんなそうするように両国高校に行って東大に行くものだと思っていました。高校生になっても学校が好きで、どの教科も大好きだったんです。こんな珍しいかな。当時は受験に九科目必要でしたけど、なんでも面白く苦になりませんでした。こうやっ

ていつまでも勉強を続けられたらいいなと、それが夢でした。イメージしたのは高校の世界史に出てくるギリシャの哲人です。白い服を着てなんかこうぞろぞろと歩きながら森羅万象を語る。よし、これになろうとね。数学も物理も面白けれど、数学者や物理学者になりたい訳ではない。きっと哲学だろうと思いましたが。受験勉強が忙しくて実は哲学書なんて読んだこともないのに大学の志望は哲学にしたのです。同級生は医者だ弁護士だと言っていたけれど、そんな気持ち理解できませんでしたね。一九六〇年代は経済成長期ですから就職のことは心配していなかったのです。父も兄達も戦争の苦勞を知っているのです、末っ子には好きにさせてくれたのだと思います。

## 学部は「山岳部」

東大を受験するつもりだったのに、その年は例の安田講堂事件の影響で東大の入試が中止、京都大学を受けました。京大に入らなければ霊長類の研究をすることはなかっただろうから、これも神様の采配です。ところが入学式に行ってみると総長がいるべき演壇は、ヘルメットをかぶった学生で占拠されている。全学ストで授業は全部中止です。そこで岩倉の農家に下宿していた下宿生で勉強会をすることになったのですが、そのテキストが「共産党宣言」。驚きましたね。みんな気分は革命家だったんでしょう。普通に勉強していた高校生がさあ

小学校入学前。江東区立明治小学校に通った。



高校の修学旅行で京都へ。



京大生時代。時代祭に参加して扮装をした。

